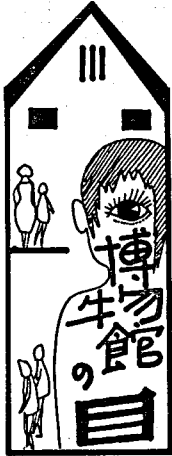


岐阜の博物館

〒483 羽島郡川島町
エーザイ工園
編集 内藤記念くすり博物館内
兼 岐阜県博物館協会
発行 TEL (058689) 3111
内線 540
振替 名古屋 70106



日博協主催博物館職員研修会
飛驒民俗村での放水見学



昭和52年度博物館職員研修会に参加して

地域に根付いた博物館研修会をもとう

日博協主催の上記研修会は昨年10月20、21日の両日にわたり、高山市の民俗村に於いて高山市共催、文部省・岐阜県教育委員会後援で開催された。テーマは以下のものである。

1. 移築建造物を主とする野外博物館の管理運営について
 - イ) 飛驒民俗村の目的と構想について
 - ロ) 飛驒民俗村に於ける防災について
 - ハ) 移築建造物の補修・修理及びその資材の調達について
2. 町並保存の諸問題
 - イ) 高山市とその他地域に於ける問題点とその対策

講師には民俗村・長倉三朗先生、高山市教育委員会・銅島大行氏、高山市消防署・大沼純雄氏がそれぞれ当たられた。

一昨年「全国博物館大会高山大会」が開かれ、その時の分科会でのテーマと類似している為か

“二番せんじ”の感はまぬがれず、出席者も三十数名と少なかった。むろん、北は青森、南は岡山から参加した人々は、それぞれにつかめるだけのものをつかんで帰ろうとする意欲は満々ではあったが、何かしら、もう一つ充実感に欠けていた。

我々の日常業務の中でわき起こる疑問、難問を皆で解決していこうという、素朴な、基本的な研修会を、当岐阜協は、他からのおしきせでなく、内から盛り上げていける力を秘めている。たて前論よりまず、岐博協会員館園の一人一人の職員が、問題を持ち寄ってディスカッションするような生き生きした研修会をこそと望みたい。日博協でも支部単位の研修会実施にむかっているし、愛博協・三博協・岐博協共同の研修会も昭和53年度から実現しそうな気運になってきている。

(K・H)

春慶会館

▽ 506 高山市神田町1丁目
TEL 0577-32-3373~5



(白壁の美しい土蔵ふうの建物)

春慶塗の真髄が一堂に

高山駅前からバスが出ている。2区め、総社前で下車、徒歩2~8分である。健脚の方は、駅前から歩いても遠くはない。国分寺は現在改修中だが、春慶会館へ向かう途中である。白壁の美しい土蔵ふうの建物が二棟、左が展示館、右が直売店になっており、その奥は広々とした駐車場になっている。

一階展示室には、受付・事務所を横切ってすぐの所に端正な茶室と水屋がしつらえてあり、まず目を引く。もちろん、観賞のみの茶室だが、春慶塗りを交えた道具類が整い、今にも茶会がもたれそうな様子だ。茶室から目を転ずると、江戸時代の、たんす、長持などの春慶塗りの大作が並び唖然とする。

二階へと続く階段に導かれて、第一室目は、「春慶塗のできるまで」が、工程を追って実物と工夫をこらしたパネルで語られる。

第二室は、広々とした展示ケースの中に、盆、膳、水指、建水、湯桶、棚などの、江戸期から



(できあがるまでの工程が壁面一杯に説明されている)

昭和初期の作品が並んでいる。裏に模様を施した硯箱など、なかなか美しい。

第三室は、現代の作家のものである。心なしか色が明るいようだが、タバコ盆、長板など、春慶独特の、軽快にして繊細な美しさがにじみ出ているようだ。

全体に広々として、明るく、ゆったりとした展示室である。やさしく、軽く、女性的な春慶を展示するにふさわしい雰囲気を持っていると言える。ところどころに背もたれのついた椅子が用意されており、休みながら、じっくりと名品を觀賞できるのも見学者にはありがたい。

帰りに直売店をのぞいてみた。たまたま、若い女性客でなかなかにぎわっていた。(高山市内全体に若い女性客はあふれている) 本当によい物を見たあとで、自分の身边にも置いてみたくなる。そんな欲望を充たしてくれる直売店には、手頃なものが並んでいて喜ばせてくれる。展示館と別棟にして、喧噪を避けているのは賢明であろう。とうとうちょっとしたものをみやげに買って、春慶会館を辞した。

輪島塗とはどこがちがうのだろうか。天然の木目の美しさをそのまま生かしているところが、この春慶塗の美の秘密なのだろうか。飛騨の自然風土の中から生まれた伝統工芸のすばらしさを、ひとりでも多くの若者にこそ知ってほしい。

(文・写真とも古田)

揖斐川町立郷土資料館

〒501-06 揖斐郡揖斐川町三輪 1300

TEL 05852-2-0219



(旧役場庁舎を利用した建物)

将来は発展する郷土館に

当館は昭和47年(1972年)4月に、揖斐小学校内から現在地へ移管され、1階は町立図書館に、2階が郷土資料館として併設運営されている。旧役場庁舎を利用したもので、町の中心部にあり、立地的には理想的で、小さな市町村が郷土館をつくる場合のひとつのあり方といえるし、図書館との併設も効果的である。しかし、その洋館風の役場庁舎階上が、郷土資料館となっていることを知らない人も多いのは残念。三室ある南側の展示室には古文献類が、北側の展示室には民具類が展示保存されている。中央の大室には、近辺から出土した考古資料を主とした歴史・教育的史料から、町民の衣食住生活の歴史の厚さを立証する民俗的資料が大半を占め、化石や薬石、ハチの巣の類などの自然資料もあり、総合展示ができる豊富さと変化に富んでいることが、この館の特長かもしれない。なかでも注目されるのは、郷土出身者の代表的な書画や甲冑、それに町民の生活史を象徴する民具類が多く収集保存されていることである。

こうした郷土資料を収集保存して、郷土館を



(展示室内風景)

設立する構想は、昭和34年(1959年)頃から始まっており、現在までに約288点が寄贈されてきた。この間に、社会教育機関として、町民への啓発とその提携を深めるために努力されてきた職員の方の陰の力は大きいと思われる。

将来は、郷土館建設の計画もあるとはいえ、現在の館の広報や展示のあり方、部屋の利用などの活用機能面は弱く、暫定的な資料保存場所になっている感じがして惜しまれる。月の平均入館者数は約10人とはいえ、夏休みには県外の三重県や広島県などから来館した学生もあったという。世代別では、小学生や中老年層が大半を占めている。

とにかく町民との広い提携の中で、どんどん郷土資料が蓄積しつつある点ではすばらしいし、生き生きしている館といえる。将来は、資料の質量ともに一般性と特殊性とを兼備するものを持っているため、歴史資料館としても、総合的な郷土博物館としても発展成立する条件は十分に有しているといえる。今後の充実・発展が大いに期待される地方の館園の一つである。館の裏側には、揖斐山城のあった城台山があり、北側は揖斐陣屋のあったところ、西隣には県社三輪神社があり、一帯は歴史的にもゆかりの多い場所である。開館日は、月曜日から金曜日と土曜日の午後で、職員2名(古田・香田氏)が従事している。(文・写真とも田中)

文化財の展示とその取扱い

岐阜県博物館学芸部 水野 一

日本で文化財の取扱い保護が法令で最初に定められたのは明治4年、古器旧物取扱法でした。後、明治21年臨時全国宝物取調局によって絵画・彫刻・美術・工芸・書籍・古文書等々の分野で全国規模の調査がほぼ10年にわたって行われています。その結果にもとづき、明治30年20条からなる古社寺保存法が制定され、国宝物の決定及び出陳義務、保存のための補助等がきまり、昭和初年の国宝保存法の基礎となります。昭和8年には、重要美術品等の保存に関する法律が定められ、美術品の海外流出の傾向に堤が築かれ、そして昭和25年に「文化財保護法」が制定され、昭和50年までに改正・補充が行われ、县市町村も各々これにならい文化財の保護（保存と公開）が活発にすすめられているのが現状です。

文化財や貴重な自然科学資料の公開の場を博物館協会組織をもって運営する岐阜県は、文化財保護の精神を実践しているものとして全国的にも名高く、博物館的施設の数も他県にひけをとりにません。多くの公開の場で資料を直接取扱いおられる本誌の人たちには、釈迦に説法のためいとなりそうですが、一昨年以來文化庁の文化財取扱い講習会で学んだ展示（出陳）の際注意しなければいけない取扱いについて述べてみます。

1. 彫刻資料 日本の彫刻の82%は仏像関係です。仏像以外には神像・肖像・仮面・動物類がありますが、このうち指定物件の90%強が木造です。

木造の彫刻物は一木造・寄木造・割矧造・板彫などがありますが、これらの文化財は各部位部品が長い年月の間に梱包・移動などで欠失・

亡失したり、矧目の緩み割れ、虫蝕、鼠害、朽損とか彩色・漆箔・下地の浮き上りや剝落などをおこしやすくなっています。

これらの資料を扱うときは事前にその状態をよくつかむ必要があります。

例えば、仏像についてみますと、梱包・移動・展示を行う前に、太い筆を洗ってボサボサにしたものでホコリを払って全体の状態をよく確認することが大切です。坐像の場合は腰まわり、立像の場合脚部に多くの劣化がみられます。

仏像などには彩色が残っているものがありますが、漆箔が浮いていて持ち上げるとき手に入力が入って、ズルッととれてしまうことがあります。

塗料は膠と顔料の組み合わせが多いので、年月が経てば脆くなっていて1カ所に力かけると剥れてしまうのです。持つときは全体に均等に力のかかるよう複数の人で取り扱うと同時に材質内部の状態を考えて取り扱う必要があります。また、時計やペン・ライターなど引っ掛かったり落ち易いものは、はずしておくことが取扱い者の心得でしょう。

仏像も勿論そうですが、仮面類は紐のあたりを持ち、顔の真中部分には手を触れないようにします。つまり文化財の価値を落さず一番損傷の少ないところを持つことでしょう。

また、石造・金属造の文化財を取扱うときは、メンタルな問題もありますが、手を洗って素手で取り扱った方がすべらず確実に取扱うことができます。

彫刻類を展示するとき、全体をみれるようにする方法と前面を見せる方法があります。各々利点がありますがいずれでも照明を近づけ過ぎ

ないよう、特にスポットライトは褪色を早めます。

2. 絵画・書籍・染色類 軸物・屏風・襖・額・西帖・絵馬等を指します。いずれも紙・板・繊維地に金銀粉・顔料・箔・雲母などを膠やふのりでとめてあるものが多く、素面に直接手を触れると亀裂や剥落をおこし、生地自体の破損にもつながります。

とくに温湿度の変化に弱く、重要文化財の展示場所の移動には、二重箱を用いて移動し、温度慣しに最低3日をおくということです。

これらの文化財は閉じたり開いたりしたりすると折り目が傷んだり・切れたり・よじれたりします。そして長く空気にふれることは酸化し易く、紫外線により褪色したりするようになります。

また軸物は、巻きおさめのときに手の力が加わり、横折れができたり、緒の巻き方が堅いと中央部分が傷み易くなります。

照明の影響を受け易いことは、文化財そのものでは判別できなくても、展示のあとその文化財を移動したとき、文化財の展示位置の床壁面と何もなかったところの床壁面とで色彩が違っていることに気づく人は多いことと思います。これを見た人は、照明が文化財に如何に大きな影響を与えているかを知ることができるでしょう。

照明設備は明る過ぎないようにすることで、200ルクスを最高値とし、紫外線の褪色防止装置を施すことが良いと思います。

かつて東博が浮世絵展を行ったとき、エリザベス女王が来館されご覧になったそうですが、この時の展示照明は50ルクスが基準であったそうです。

襖などを動かすとき、袖口や裾が引手やオゼに引っかかり破損することがあります。雨の日の紙・繊維は湿気を吸い込んでエンピツが落ちても破れることがあります。

和紙や繊維地の古書画には、材質の毛管現象やはじきをなくするため**明ばん**を用いて**どうさ**(みょうばんを溶かした水にニカワを混ぜ素材

にしませる)を行っているものが多くあります。明ばんは硫化物ですので、このような文化財には黄ばみが生まれ、繊維質が弱くなっていますので梱包・開包・展示の際の取り扱いには特に気をつけたい条件です。

3. 工芸・考古

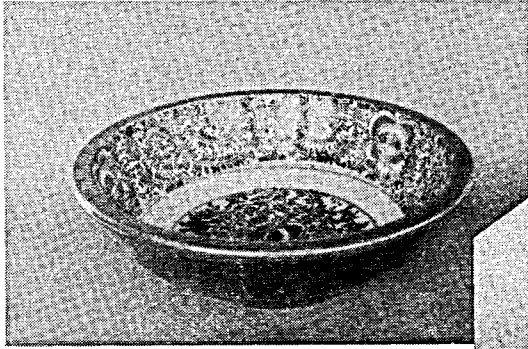
工芸品には異質素材の組み合わせのものが多くあります。例えば日本刀の刀身と拵や甲冑の織と札などです。金属・ガラス・陶器には白露現象という危険な現象が伴っています。これらは長い時間の間に徐々に錆化がおこるため、異常に気づいたときは手遅れということが多いようです。同一展示ケース内に湿気に強いものと弱いものが同居するときはその取扱いに特に注意する必要があります。

漆器類は酸に強いのでメッキと同じように表面は変化をみせないけれど、下地・生地が弱くもろいので取り上げるときに慎重が必要です。

陶器類や考古資料は物理的な力には全く弱いので、写真を撮るため上からのぞき込んでカメラやレンズ、ポケットのライターを落したとか、片手で指をかけたりにして欠けたり、割ったり、ひび割れたりすることも少なくありません。物理的に破損し易いものは下から受けて持ち、大きなものは身体の一部で支えられるように持つことです。勿論できるだけ低いところで取扱います。

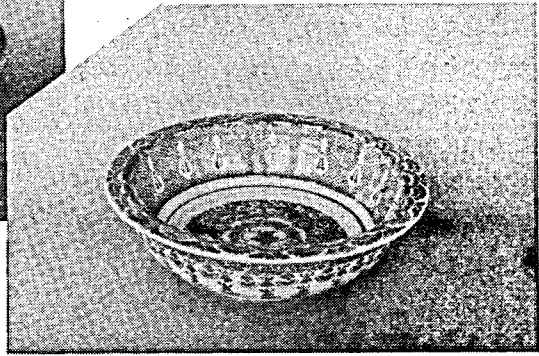
展示のとき、金属製品の下に綿や布をじかに敷いてある例をみますが、これは湿気を吸い易く汗をかくので錆化を早めるもとになります。刀・鏡などの金属製品は錆化の直前にくもってくるので、この段階で発見し磨くことが大切です。

岐阜県ほど文化財に恵まれている地域は他に例を見ません。この文化財は常に東西の歴史の流れに生きつづけ伝えられた貴重な先人の遺産です。このような文化財を保護しておられる多くの所有管理者の幾多の努力が、文化向上の糧となっている限り、先人の遺産を後世に永く伝えるためにもその取扱いは大切な問題の一つだと考えています。



(赤 井)

(摺り絵井)



岐阜県陶磁器陳列館特別展

井展に寄せて

嫁の、母の……………

涙と喜びと逞しさを伝える器たち

岐阜県陶磁器陳列館長 古川 庄 作

前に明治の焼き物「印判もの」展をもったとき、幾人もの年配の婦人から、田舎の薄暗くだった広い寒々とした炊事場で、終日立働いていた祖母や母が想い出されて、とても懐しいと言われたものに、摺り絵の井(どんぶり)があった。それは、いまだきどの家庭からも消えてしまった厚く大きく深い焼き物の鉢で、井鉢という類のものであった。

この特展でとりあげた井は、^{うどん}鯛井・^{てんどん}天井など店屋ものの井飯を盛る蓋のついた井茶碗とは違った大型の蓋のない井鉢である。日本では江戸時代に、井という言葉が生まれているというが、井の語源を求めると、朝鮮のタンバルからきたものであろうという。いわゆる朝鮮のそば屋・汁掛飯屋などで用いる鉢のことで、湯鉢の字を当てている。湯はこの場合汁物の意である。

井は、決して大都会のスマートな家庭の台所で使われるのにふさわしい器ではないが、飛騨

高山の民俗村の家なら、どの家で使ってもうってつけの器である。古く、どっしりと落ち着いて、明治の日本を想い浮かばせる家には、不可欠の器でもある。井は、食膳・食卓にのぼる器ではないが、明治の台所が偲ばれ食生活が判り、台所と食事を受け持った明治女の息吹が伝わる焼き物である。御惣菜を鍋から井に移し、井からめいめいの小鉢・小皿にとり分けてくれた祖母の箸の動きが目に浮かぶという焼き物である。せわしげに、井から大勢の客膳に盛り分けていた母の姿が想い出されるという焼き物でもある。大は直径35cmのものから小さいものでも18cm程度、圧倒的に数の多いのは、22~25cm位のものである。用途もそれぞれ庶民の知恵で、時には盛り鉢となり、うどん鉢、漬物鉢とも融通無限である。表に出る茶碗類とは違った裏方の焼き物といってもよく、明治時代の田舎の生活を写したともいえる焼き物である。井を購入

した誇り高い男衆達よりも、ささやかに家を守った女衆達の涙と喜びと逞しさ、ひそかな誇りをさえ伝える器である。そしてまた、それを自分の持ち物とした嫁たちの、他人には洩らさなかった溜息すらも吸い込んでいるようでもある。

焼き物の商賈に多少ともかかわり合いを持った人であれば、誰しも井といえば駄知井(だちどん)の名を思い出すが、駄知井の基礎を作った人は、塚本亀吉であった。亀吉井と呼ばれる井を初めて作ったのは、安政元年(1854年)といわれている。ようよう幕末に、焼き物が盛んとなり新製ものが生まれだした美濃で、何を焼いたらよいものかと腐心した亀吉は、焼き物の先進地を方々訪ねている。遠くは有田へも行き、近くの瀬戸・品野へは度々出かけて、駄知にふさわしい焼き物は何かと、最後に選んだのが井であった。

初めは有田の井を手本としたものであろう。絵付や呉須はそっくり有田のものであるが、悲しいかな美濃と有田では、第一に素地土が違うところから、駄知の土で有田のような薄い井を作るとはむづかしい。いきおい小型であっても厚手にならざるをえない。それを歪まないように焼くにはと、苦心を重ねてそぎ目を入れている。三方の側面に3~5本、中には8本も深くそいだ機構となっているが、それがまた亀吉井の見どころである。初期の亀吉井には、未完成の調土のために、素地が磁器化しないまま買入

の買ったものもある。

駄知では、その後亀吉井に続けとばかり、誰も彼もの窯屋が井を手がけたので、いよいよ井が盛大になっていった。駄知井の名が通る窯場の町ともなった訳である。この軌道にのった駄知井の名を、いっそう高めたものに、赤どんと目される粗井がある。これは、従来なかった鉄赤の釉薬を外面全面に施した三つ重ね井で、籠橋休兵衛が考案した珍しいデザインと焼き方に新案(落しはま)を盛った井であった。保籠橋休兵衛が、多治見の分加藤庄六(先代)と5年間赤どんの一手販売契約をしたのは明治26年である。その頃から、一般の景気は不況となり、明治27~8年日清戦争が起こると経済活動は全く萎縮してしまい、最初の契約価格は1組14銭であったものが、いつの間にか9銭9厘まで下っていたという。

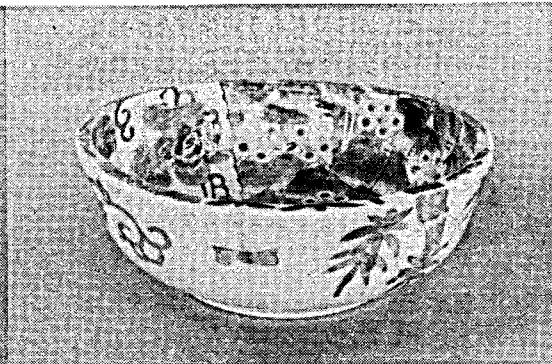
赤どんは、山方駄知の窯屋と、町方多治見の陶器商とが、国勢発展に応じて、中国・朝鮮への貿易開拓に力を注いだ一つの商品で、井とはいえ、当時輸出に気を吐いたものである。摺り絵文様が見込み一杯につけられた中国向けの井である。

明治に盛んに焼かれたものには、他に、飯茶碗・煎茶碗・番茶碗・蒸茶碗・湯呑・盃・小皿・中皿・大皿・徳利などがあり、これらは現在でもなお引続き焼かれている。それらに比べると、井は明治の初めに作られ、明治20~30年頃が

(亀 吉 井)



(大 井)



もっとも盛んに焼かれ、ほぼ明治の末には消えた焼き物である。

幕末から明治にかけての井は、唐呉須を使った手描きのものであるが、明治6年有田の松村九助によって、瀬戸・美濃へ酸化コバルトが伝えられると、コバルト顔料を絵具に使った鮮やかな絵付けものへと変わっている。プルシャンブルーの手描きものは、当時最新流行の色をとり入れたハイカラな時代色を写した焼き物といってよかろう。材質と技法が確立してくると、次第に井には、水墨山水風の絵柄から脱して、自由闊達な構図をとる大形豪華な井が生まれてくる。やがて明治が進み、焼き物が庶民の生活に浸透してくると、一転して手描きものから、型紙摺り絵ものが量産されるようになった。この技法は、伊勢型紙から採ったものである。この技法は、伊勢型紙から採ったものである。染め物に似た図柄が多く、一見それと判る独特の焼き物である。大皿から中・小皿、飯茶碗などにも、当時は盛んに型紙摺り絵は利用されている。何といっても、型紙を深目の井に当てつけて絵具を摺り込むのであるから、他の平物・小物と違い井にはかなりむずかしい手仕事が必要されたものであろう。今このような技法を復活させようとする、薄手の型紙切りから、型紙を井に貼りつけるにも大変困難が伴うものである。当時のたぐみな仕事振りに感心するばかりである。

摺り絵井が、他の絵付け井に比べて断然数が多く、優れたものの多いのは、長く続いた封建社会から開放され、鎖国が解かれて文明開化を享受してきた庶民の、次第に高まるエネルギーに応じて作られたからであろう。赤どんが輸出に向けられた明治26年から推すと、摺り絵井は大体明治20年前後に焼かれたと考えられる。次いで、明治24年の濃尾大地震の打撃によって、美濃の窯どころは潰滅的な損害を受けるが、これを克服するには、よりいっそう大量の需要のあるものを作らねばならなかった。庶民向焼き物の廉価品をと考えると、勢い製品コストの引き下げをはからねばならない。従来のような一品宛手描きをした「揚げはま」ものから、型

紙を当てて摺ると、一枚の型紙から数十枚は摺れる摺り絵ものに進んできた。さらに一段と飛躍した技法、エッチングによる銅版転写は、一枚の銅版から約3000枚ほどは転写、印刷することが可能となっている。そして、赤どんのような『落しはま』の先駆者も現われると、井も着実に庶民の器となっている。

こうした目まぐるしい技法を駆使して、より多くより安くへと進んだ井にも、やがてコバルト一色の下絵ものに飽きられる時がきた。呉須の摺り絵や呉須の銅版に一色か二色をつけたした絵柄のものが焼かれている。あるいは赤どんの鉄赤に代って、青元あおもと（クロム緑）を使った青どんが生まれたり、正門子しょうもんじ・クロム呉須、墨呉須、コバルト呉須を吹くとか、白盛りしろもなどの手法も試みられている。しかし、伊万里や九谷の見た目の美しい上絵ものにはとうてい勝てない。必死になって、銅版ものに赤絵をつけて追いあげようとするが、追いつくこともないうちに、どんどん変わる食生活の洋風化に押されて、美濃の井にもやがて消える時がきていた。大正中頃のことである。

戦後、物資不足の頃、一時呉須手描き下絵の三つ組井が飛ぶように売れたが、それも短い期間であった。しかし、駄知は、駄知どんの街として、今日もなお蓋付井茶碗を盛んに焼いている。

井、それは明治の社会の経済と焼き物の技術の流れを、色濃く染めた焼き物である。芋の煮つけを盛っただけではない。嫁として、母として、家へ子どもへの願いをまで盛り込んだものが井である。特別展として展示した井も、すべて庶民が使いに使った器である。明治・大正・昭和と、激動した社会を生き抜いてきた日本の嫁の歴史がこめられている焼き物である。使った人を思い出させる焼き物である。

新しい映像展示

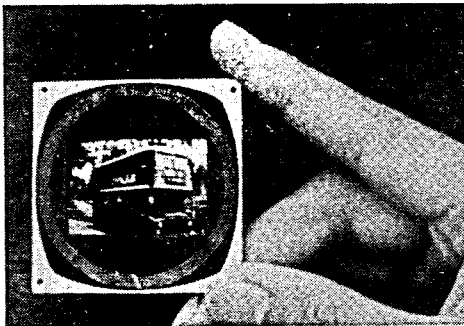
トーキースライドによる提案

三洋電機 開発研究所 武田 和 忠

トーキースライドは、先年高山で開かれた全国大会に於て、研究発表の一部に使用されたのを契機に、ある程度広く博物館関係の方々に知られるところとなりました。

大会に際し、出席の方々の活動と意識に触れ、それによって初めて、博物館における視聴覚機器の位置といったものを考える習慣を得た者が、おぼろげに形成されつつある意識を発表することには、いささか面映い感覚がありますが、あれはどうなった、との幾つかのお問合わせに対する回答を兼ねて、新しい抱負を込めて述べさせていただきます。

トーキースライドとは スライドマウントで、フィルム周囲にサウンドトラックを設けることが、技術的に可能となり、トーキースライドと呼んでいます。その内容は、第1図で直ちに了解いただけます。通常実用されてい



第1図 トーキースライドマウント

る音声スライドは、テープレコーダの動作と同調して、スライドをコマ送りする方式ですが、トーキースライドはその点で、原理を異にしているものです。今技術については述べませんが（興味のある方は、オーム社刊「新電気」52年11月号を御参照下さい）、音声は画像に対してずれることがあり得ないのが特徴です。

映像による情報手段として、スライドを映画と比較した場合、スライドには内容の追加、省

略、とび越し、くり返し等が随時可能であるという、優れた特性があります。映画では、これらを映写操作として行なうのは無理であり、映写に先立ってそれをするのは編集になります。むしろ新しい映画を作ることに近い作業です。スライドがこのような大きな柔軟性を持つのは、技術としての原始性に基づいています。

しかしスライドには音声に伴わない、それは大きな欠点である。そういう見地からテープレコーダ連動の装置が生まれました。但し大きな犠牲、柔軟性を捨てるという代償が必要でした。この種のスライドでは、内容の一時的変更という操作は、もはや不可能になっています。

こう考えれば、もうお分り頂けたと思います。が、トーキースライドの基本的な意義は、内容構成に対する柔軟性を保ったまま、音声分野にまで機能を拡大したことにある、と言えます。

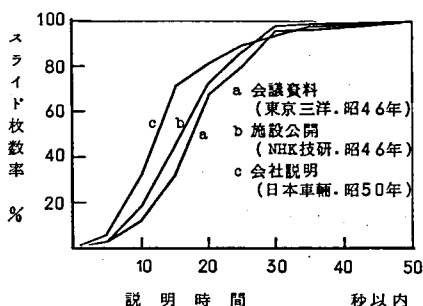
原始性のたくましさを失わないで、文明社会をも押し通して行く頼もしさを、私はこのシステムに見出しています。

トーキースライドでは 上に述べた意味で柔軟性がトーキースライドの命であり、それを最大限に発揮させることが、このスライドをさらに活かす道であります。この意識はスライドマウントのサイズの設計にも用いられています。50mm角、2.3mm厚以下という、一般スライドの寸法規定に合わせているのです。形状と寸法が伝統的なスライドと同一ですから、トーキー化したスライドも、必要があれば一般のプロジェクタにかけることができる（当然音声は出ませんが）と共に、トーキースライドを視聴する中に、参考資料として一般スライドを混入することも支障を起しません。ところで……

「トーキースライドは、マウント上の限られた面積に録音しますから、音声時間には限度があって、最大30秒です。短いと感じられるか

も知れませんが、統計によれば、90%以上のスライドが、30秒で十分説明されており、むしろ長い説明は退屈を感じさせるものです。長短織りまぜて、最大を30秒におさえること、それがスライド構成のコツとさえ言えます。]

上の数行をカッコに入れたのは、音読して30秒一杯となる見本を示したつもりです。30秒は制限ではありますが、かなりの内容を盛り込める時間であり、スライドの情報手段としての機能を阻害するものでないことが、これから分か



第2図 説明所要時間

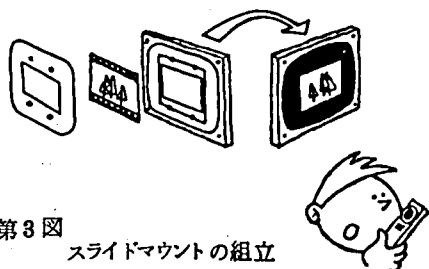
ると思います。第2図は、テープレコーダ同調のスライドプログラムの説明時間の測定例です。時間制限を持たない音声方式ですから、ここに測定された時間は必要にして十分な長さであると言えます。グラフはこのように読めます。

「20秒間で70%のスライドが説明でき、30秒間は90%に対して十分であり、50秒を超える説明の必要は先ず無い」と。

以上トーキースライドを要約すれば、

1. スライドの一枚毎に個別録音
2. マウントは標準規格寸法
3. 一画面30秒間の磁気録音 となります。

スライドマウントは、第3図に示すような構



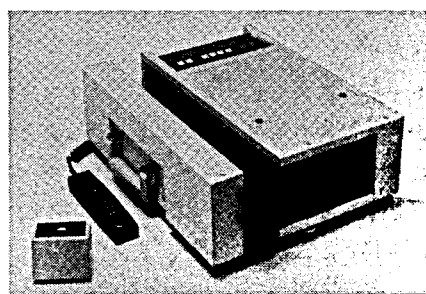
第3図 スライドマウントの組立

造になっています。録音は簡単でテープレコーダと同じ。録音後すぐ音声再生して確認でき、また録音の消去や再録音も自由です。

博物館への適用

さて、博物館での実際の活用については、トーキースライド自体を言う場合に比べて、残念ながらペンの進みは円滑性を欠きますが、認識の至らなさについてのお叱りを覚悟の上で考察し期待していることなどを二三記してみます。

研究に 博物館活動の内、収集記録が重点の研究活動は重要な分野でしょう。かなりの量のスライドが蓄積されていることが多いようですが、その内容説明は、採集者本人の記憶に頼ることが一般的と見受けられます。プリント写真の



第4図 トーキースライドプロジェクター一般用

場合アルバムに納め、説明文を添えて、後日他の人にも役立つよう整理できますが、それに相当する、スライドの処理手段は従来無かった訳で、それがここに実現したのだと考えられましょう。研究データという順序の無い物の説明には、個別録音が基本的必要条件と言えます。

展示に これについては幸い実例があります。第5図、箱根町立大涌谷自然科学館の場合です。写真は杉並木を形どったコーナー、その太い幹にスクリーンが嵌め込まれていて、幹の中に装置したプロジェクタから、箱根の自然や史跡が音声と共に映写されます。この映写は、幹についたフックにかけられたイヤホンをとり上げると自動的に始まり、イヤホンを戻すと停止し、スライドは一連約10枚です。

この種の映像展示は従来、無音で画面のみ見せる。画面の変化に関係なく音楽等を流す。説



第5図 トーキースライドプロジェクター2
自動繰返し映写機

この装置はそうではなく、正しい対応で画面を説明する。観覧者が去ったら途中でも映写を終え、スライドは瞬時に第1枚目へ戻る。次の客は必ず第1枚目から見る事ができる。このような順次動作が確実に実行されており、良い展示効果を見せています。

上の装置は多少凝った機能ですが、そこまで行かず、単に連続映写の説明に用いる場合でも、画面と説明とに、くい違いが発生しないことだけで、十分価値があるということも、各所で指摘されています。

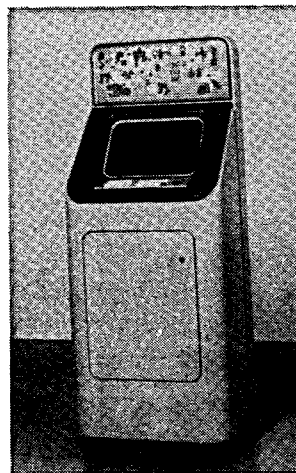
次に、選択情報の提供システムとも言えるものがあります。選択ボタンを押して、希望の事項に関する情報を学ぶことができるものです。任意検索（ランダムアクセス）機能のスライドプロジェクタを準備することが前提となりますが、画面だけでなく、音声の検索も伴うことを期待すると、トーキースライド以外の方式では、非常に高度な技術が必要になります。また、検索で得られる情報がスライド1枚でなく、一定しない何枚かで構成される内容となるような要請の場合には、実現の難易の差は一層広がります。

上のシステムの最も大がかりなものとして、先頃公開された国立民族学博物館のビデオテークがあります。あの途方もない装置は、到底一

般の館園が導入する対象とはなり得ないと思えますが、トーキースライドは、そのミニ版ないし普及版といったものを提供することができます。しかもこの場合、内容を常に最新最適のものに更新維持できますから、或る意味では、より優れたものとなります。トーキースライドによるこの機能は、観光案内の分野で早くから注目されており、近く実用化される運びとなっています。

ある博物館で、私が見ているそばを、もつれながらす速く行き過ぎた数名の子供達がいました。何かと目をやると、選択によって映写されるスライド装置のあるセクションがあって、先を競ってボタンを押そうとしているのです。引率の先生の注意でも受けているらしく、大声をあげないで争っているのは、ほほ笑ましい迫力があります。そんな場面に行き会って改めて博物館というのは静かに見ることを主体にする所だなど、感じ入ったことでした。元気な子供達は、聞くこと、触れること、話すことを封じられて、一種抑圧感を持っていたのかも知れません。そんなとき自分で何かをやれる機会があるのは、大きな喜びとなるようです。視聴覚装置というのはそんな効果があるのかと今さらに知った訳ですが、つまり視聴覚性は大切な機能

第6図 トーキースライド
プロジェクター3
検索式観光案内機



であるものの、より基本的に、参画意識を持たせる装置としての認識もまた必要であろうと思ったことでした。

博物館活動は、トーキースライドの活用を開発する者にとって、広大なフロンティアとしてとらえることができるようです。

≡≡ 県内ニュース ≡≡

高山市郷土館 改築・拡充へ

これまで明治時代に建てられた道具蔵を展示室に活用しているだけで、多くの資料が酒蔵を利用した倉庫に眠っていた高山市郷土館は、現在の木造2階建ての管理棟を鉄筋コンクリートの管理棟に新築、隣接民有地200㎡、土蔵2棟を買収、旧道具蔵・酒蔵などあわせて6棟となる土蔵は、建物自体も貴重な博物館資料であり、展示場も改築拡充して、本格的な「博物館」として、11月1日の市制記念日開館をめざしている。事業費1億3000万円の予定。

関市、文化資料展示室計画

関商工跡地に建設中の新市民会館とともに、残された旧校舎を図書・資料館に改装中。これまで文化会館倉庫に眠ったまゝの陽徳寺古墳群、十六所山窯、松ヶ洞弥生遺跡などからの出土品、関青年会議所が収集寄贈した民具類などに加え、特産の刀剣・刃物製品の展示も計画され8月開館の予定。

瑞浪市、^{しゆく}『宿の資料館』計画

中山道時代の宿場町の面影を残す同市大湫町にある「三好屋」の屋号で呼ばれていた江戸時代の旅館が、大湫宿保存委員会と同市教委との話し合いで「宿の博物館」とすることがまとまり、53年度事業として修復元され、宿駅制度に関する古文書、要人往来の記録、宿の暮らしぶりを伝える民具などが展示公開される予定。

『どんぶり』を集めた 特別展へどうぞ

岐阜県陶磁器陳列館（多治見市陶元町）では、幕末から明治・大正初期にかけて、庶民の食生活に密着して愛用された大小、種々雑多など

ぶり約100点を集めて特別展を開催。1月10日から2月いっぱい期間で、現在では姿を消した珍しい品の数々に、当時の庶民の食生活や、どんぶり焼きにかけた職人の喜びや努力の跡が感じられる催しもの。

県博：写真紹介『郷土の動植物』開催

岐阜県博物館では、写真資料による「郷土の動植物」紹介を図書資料室で開催。岐阜県の植生、花と分布、カモシカの生態、カリバチ類の生態、野鳥の生態、それにウマ年にちなんで木曾馬の紹介が約120点の写真で解説されている。1月5日から月末まで。

編集後記

☒ 私たち現代人の台所から、すっかり姿を消している井（どんぶり）について、古川先生にあれこれ綴っていただきました。永年にわたる地道な調査研究と収集の努力、その成果にもとづく特展だけに、借り物でない地域に根づいた博物館の特展のあり方の本物がうかがえ頭がさがります。

☒ 活字文化よりも映像文化になじんだ人間が増加している今日、博物館の展示技術も、新しい映像技術をうまく活用する必要があります。その意味からも、オートスライドなど、新しい技術にも開眼を。

☒ 発刊の遅れを内容面で充実させよう……と頑張りましたが、本号の中味は、いかがでしたでしょうか。お蔭で、始まったばかりの「この人を訪ねて」は、スペースの関係で次号へまわすことになりました。

☒ 3月には、41がおとどけできるペースで編集集中です。各館園の催し物、近況など、どんなささやかなニュースでも、どんぶり事務局まで連絡下さい。本誌の一層の発展のために、ますますのご支援とご教示を。